



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語の動詞句における時間表現の指導の一環としての進行相と完了相の指導 : 0. 動詞句における時間表現の指導体系の順序構造
Author(s)	大竹, 政美
Citation	教授学の探究, 5, 7-13
Issue Date	1987-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13539
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p7-13.pdf



英語の動詞句における時間表現の指導の 一環としての進行相と完了相の指導

北大教育学部教育方法学研究室
英語教育研究サブグループ

0. 動詞句における時間表現の指導体系の順序構造

大 竹 政 美
(北大大学院教育学研究科博士課程2年)

0.1 動詞句の構造と文法的カテゴリー

Will take, have taken, are taking, were taken, will have been taken などのような“迂言形式”は、伝統的には、動詞語彙素 TAKE の諸形式であると (*will take* は“未来形”であり、*have taken* は“完了形”である、などというように) 分析されている。しかしながら、*have taken* のような形式は、*took* のような形式とは区別される。「統語論的な構成素構造」を、後者は持っていないが、前者は持っているのである。*took* という形式は、TAKE の語彙語幹から「屈折形態論の規則」によって派生されるものであるのに対して、*have taken* という形式はそのようなものではない。完了は‘助動詞 HAVE+過去分詞’という手段によって形成されると述べるのは、「統語論の規則」である。*have taken* は語彙素 TAKE の一形式ではなくて、助動詞 HAVE の一形式と動詞 TAKE の一形式から成る「動詞句」(verb phrase) なのである¹⁾。

動詞句は、省略の場合以外には義務的な主要要素である1個の動詞と、随意的に現れる1個以上の従属要素から成る。この節におけるわれわれの興味は、助動詞を随意的な従属要素として含む動詞句にある。動詞は4個までの助動詞を前に従えることができ、次に示される4つの助動詞の位置が区別される²⁾。

	助 動 詞			動 詞
法	完 了	進 行	受 動	TAKE
CAN	HAVE	BE	BE	TAKE
MAY				
MUST				etc.
WILL				
⋮				
⋮				

上の表に示された4種類の助動詞はいずれも随意的であるから、法助動詞の選択の違いを無視すれば、 $2^4=16$ 通りの相異なる組み合わせが可能である。それらの組み合わせを、法助動詞の代表をMAYとして、例示してみよう³⁾。

	助 動 詞				動 詞
	法	完 了	進 行	受 動	
i					<i>takes</i>
ii				<i>is</i>	<i>taken</i>
iii			<i>is</i>		<i>taking</i>
iv			<i>is</i>	<i>being</i>	<i>taken</i>
v		<i>has</i>			<i>taken</i>
vi		<i>has</i>		<i>been</i>	<i>taken</i>
vii		<i>has</i>	<i>been</i>		<i>taking</i>
viii		<i>has</i>	<i>been</i>	<i>being</i>	<i>taken</i>
ix	<i>may</i>				<i>take</i>
x	<i>may</i>			<i>be</i>	<i>taken</i>
xi	<i>may</i>		<i>be</i>		<i>taking</i>
xii	<i>may</i>		<i>be</i>	<i>being</i>	<i>taken</i>
xiii	<i>may</i>	<i>have</i>			<i>taken</i>
xiv	<i>may</i>	<i>have</i>		<i>been</i>	<i>taken</i>
xv	<i>may</i>	<i>have</i>	<i>been</i>		<i>taking</i>
xvi	<i>may</i>	<i>have</i>	<i>been</i>	<i>being</i>	<i>taken</i>

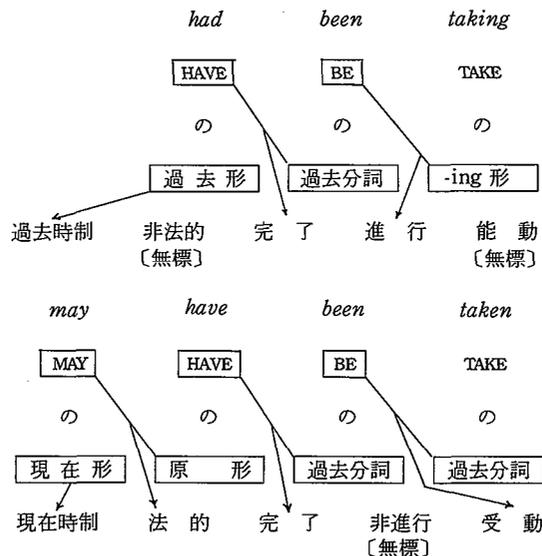
動詞句の構造を支配している1つの重要な原理は、「それぞれの助動詞が、その次に来る〔要素〕の屈折形式を決定する」というものである。4種類の助動詞のそれぞれについて、規則を定式化すると、次のようになる⁴⁾。

助 動 詞	次に来る要素の屈折形式
法	原 形
完 了	過去分詞
進 行	-ing形
受 動	過去分詞

上の表に与えられた諸規則は、動詞句における「最初〔の要素〕以外の」それぞれの要素の屈折形式を決定する。そして、「最初の〔要素〕は、時制の屈折のうちの一つを帯びる」。先の例示では、最初の要素は、(i)では *takes*, (ii-iv) では *is*, (v-viii) では *has*, (ix-xvi) では *may* というように、すべての動詞句において、現在時制形式をとっている。これらの形式はそれぞれ、対応する過去時制形式 *took*, *was*, *had*, *might* を持っており、この、時制の屈折の対立を考慮に入れると、可能な組み合わせの数は $2^4=16$ から $2^5=32$ になる。「時制の選択は、1つの動詞句につきただ1つしかなく、最初の〔要素〕の屈折によって決定される」から、「時制の対立を、助動詞の選択に関係する対立といっしょに、動詞句のレベルで扱うことができる。」こうして、動詞句について、5次元の対立が認められ、これらの次元のそれぞれから、次のような文法的カテゴリーが得られる⁵⁾。

文法的 カテゴリー	項	動詞句の対応する構造的 특성
時制	i 過去	: 最初の要素が過去時制の屈折を帯びている
	ii 現在	: 最初の要素が現在時制の屈折を帯びている
分析的法	i 法的	: 法助動詞を含んでいる; その次の要素が原形である
	ii 非法的	: [無標: 法助動詞なし]
完了相	i 完了	: 助動詞HAVEを含んでいる; その次の要素が過去分詞である
	ii 非完了	: [無標: 完了の助動詞なし]
進行相	i 進行	: 助動詞BEを含んでいる; その次の要素が-ing形である
	ii 非進行	: [無標: 進行の助動詞なし]
態	i 受動	: 助動詞BEを含んでいる; その次の要素が過去分詞である
	ii 能動	: [無標: 受動の助動詞なし]

動詞句の構造と分類の間の相互関係を例示しておこう⁶⁾。



なお、態は、「第一義的には節の[レベルの][文法的カテゴリー]」であって(たとえば, *John took the money* は能動節であり, *The money was taken by John* はそれに対応する受動節である), 「派生的」にのみ動詞句に適用される⁷⁾。そこで、本稿では、これ以上態を考察しないことにする。

0. 2 動詞句における時間表現の指導体系の順序構造

われわれは、現在のところ、次のような順序構造を想定している。

0. 2. 1 (文法的カテゴリーとしての) 時制

この節では、分析的法・完了相・進行相について無標である動詞句のみを取り扱う。

ここで問題にされる意味上の対立は、時間のうちでの、「発話時に相対的な位置づけ」にかかわる。たとえば、'He took the bus to work' では、出来事または事態は「過去」、すなわち、

「発話時に先行する期間」に位置づけられているのに対して、‘He takes the bus to work’では、(少なくとも最も顕著な解釈では)事態は「現在」、すなわち、「発話[時][と同時である現在時点]を含む[任意の長さの]期間」に位置づけられている⁹⁾。要するに、この段階では、「現在時制」は「事態時と[発話時]の一致」を意味し、「過去時制」は「事態の、[発話時]に先行する位置づけ」を意味する⁹⁾、とするのである。

‘事態’とは、「行為、出来事、過程、関係、状態、その他、節が表現するもの何でも適用範囲とする、全く一般的な専門用語」である。事態は、‘動的’であるか‘静的’であるかのどちらかである。前者の場合には、事態は‘起こる’といわれ、後者の場合には、事態は‘成り立っている’といわれる。そして、‘事態時’とは、「事態が起こる、または、成り立っている」として提示される、時——時点または期間」である¹⁰⁾。

0. 2. 2 未来時表現

この節では、完了相・進行相について無標である動詞句のみを取り扱う。

次におけるように、「未来時への指示がある時のWILLの用法」を考察しよう。

He will be seventy tomorrow

「事態時が未来である時には、現在時制の非法的な動詞句が用いられうる」から、上の節は‘He is seventy tomorrow’と対立している。こうして、「isはwill beと、現在時と未来時の両方について対立する。」

		現在時		未来時
- will	i	He is seventy now	ii	He is seventy tomorrow
+ will	iii	He will be seventy now	iv	He will be seventy tomorrow

しかしながら、「isとwill beの関係は、未来時について、現在時についてと単純に同じであるわけではない。」最も明白な違いは、「現在時については、willなしの形式の方が、willありの形式よりもずっと頻繁に現れるのに対して、未来時については、その逆が真相である」ということである。「事柄の本性によって、私たちは未来について、現在または過去についてと同じ確信をもって語ることが一般にはできず、したがって、未来についての法的に限定されていない断言を行うことが適切であるのは、かなり特別な条件の下においてのみである。」つまり、「WILLの意味は、未来時について用いられる時でさえも、少なくとも、法性の何らかの潜在的な要素を持っている」のである¹¹⁾。

さらに、次のような、ある種の従属節を考察しよう。

When you feel better, [get in touch with me]

「時は未来であるが、ここではwillを用いない。」問題になっていることは、‘あなた’の気分がもっとよいことの、「単純に時であって、事実性ではない」から、「法的な限定は場違いであろう」¹²⁾。

0. 2. 3 (文法的カテゴリーとしての) 進行相

この節では、分析的法・完了相について無標である動詞句のみを取り扱う。

「進行は事態を、‘進行中’であるとして提示する。」このことは、「事態が、……全く静的であるのとは反対に、多かれ少なかれ動的な特性を持っていると考えられている」ということを

含意する。そのことは、また、「事態が、少なくとも継続の可能性を持っていると見なされ、したがって、その(可能的な)時間的総体においてではなくて、時間の何らかの‘部分区間’、[すなわち]その、時間の総区間の内部の時点または期間において見られている」ということも含意する。これに対して、「非進行は事態を進行中としては提示しない。事態は、静的であるか動的であるかのどちらかであって、後者の場合に、行為、過程、その他が、その時間的総体において見られ、したがって、ある1つの出来事として提示されるのである。」たとえば、次の対立を考察されたい。

i It was raining

ii It rained

「進行/非進行の対に見られる、より特定のな意味の対立」は、おおむね、「上述の一般的な対立の特殊な場合」で、「[進行]相の対立の、文の他の諸特徴との相互作用から予測可能」である、とみなされうる¹³⁾。

0. 2. 4 未来時表現(続)

この節では、分析的法・完了相について無標である動詞句のみを取り扱う。

進行と非進行の両方が、未来の事態を表すのに用いられうる。

i John is leaving tomorrow

ii John leaves tomorrow

「未来時の解釈を持っている現在時制の用法には、語用論的な制約がある」が、「これらの制約は、進行についての方が、いくぶん厳しいらしい。」「進行は、私たちが単に、自然[界]における規則的なパターンに従う事象の未来への投射を持っている場合には、用いられない。」たとえば、‘The sun rises at 5:15 tomorrow’は全く普通であるのに対して、‘The sun is rising at 5:15 tomorrow’はそうではない。また、「進行は、典型的には、主語の名詞句によって指示される人の、より大きな主導性、意図を暗示する。」たとえば、‘I can’t come to the party because I’m doing/I do my marking tonight’において、「進行」は事態を「個人的な意図の問題」として提示しており、「非進行」は「何らかのより一般的な予定の問題」として提示している¹⁴⁾。

‘BE going to+原形’は、未来時を表現するために頻繁に、特に形式ばらない話し言葉で用いられる¹⁵⁾。さて、大江(1982)によれば、次の、位置変化を意味する動詞 GO を含む文は、3通りに多義的である。

I am going to see him.

第1は、‘am going’が、0. 2. 3で考察したような、事態を進行中として提示する進行の動詞句である場合である。第2は、同じ‘am going’が、この節ですでに触れたような、未来の事態を表すのに用いられる進行の動詞句である場合である。そして、第3が、‘am going to see’が、ここで問題にしているような、未来時を表現する‘BE going to+原形’の例である場合である。この未来時表現は、第1の場合におけるように、「空間的 [位置変化]」が進行中であることを意味する‘BE going’が、「時間的 [位置変化]」が進行中であることを意味するように、「比喩的に転用されたもの」である¹⁶⁾。

0. 2. 5 現在完了

この節では、分析的法・進行相について無標である動詞句のみを取り扱う。

たぶん、

i Kim *has been* ill

ii Kim *is* ill

のような対立する対における「完了と非完了の間の最も明白な意味上の違い」は、Kimが病気であるという事態が、「(i)では過去時に、(ii)では現在時に位置づけられている」ということである。しかし、これは、「Kim *was* ill」と「Kim *is* ill」の間の違いでもある。そこで、いわば、競合している現在時制・完了と過去時制・非完了の間の対立、たとえば、*has seen*と*saw*の間の対立を検討することにする。「[現在] 完了と過去 [非完了] の間の本質的な違い」は、次のようなことである。現在完了は、「事態を、過去に始まり、前方へ広がって、現在(発話時、より一般的には、関連時 [= 事態時が関係づけられる時])を含むに至る期間の内部に位置づける」。それに対して、過去非完了が用いられるのは、「事態時が、全部過去のうちにあり、現在を除外するある1つの過去であると認定される」場合である。要するに、現在完了は「[現在] 包含的過去」を意味し、過去非完了は「[現在] 除外的過去」を意味する¹⁷⁾。現在完了のこの「現在」の要素の源泉は、完了の助動詞 HAVE がとっている「現在時制」である¹⁸⁾。

0. 2. 6 現在完了進行

この節では、分析的法について無標である動詞句のみを取り扱う。

完了進行は、「その構成要素 [である完了と進行] の意味から全部予測可能であるというわけではない意味領域」を持っている¹⁹⁾。

完了進行とは違って、完了非進行は、その「結果的意味」のために、「その節が継続の副詞的語句を含む時に、完成動詞とともに用いられえない。」

They've been repairing the road for months.

**They've repaired the road for months.*

「終結的動詞が継続の副詞的語句に伴われていない」場合には、その含意はしばしば、「その事件の効果が依然として目に見える」ということである。

You've been fighting again. ['I can tell that from your black eye ']

このような場合には、「動詞によって指示される活動が、最近止んだと想定されている。」²⁰⁾

0. 2. 7 過去完了

この節では、分析的法について無標である動詞句のみを取り扱う。

次におけるような過去完了を考察しよう。

[I arrived at six,] but she *had left* a few minutes before

「彼女」の出発の時は「私」の到着の時に「相対的な過去」であって、かつ、後者の時は「発話時に相対的な過去」である。こうして、*had left* についての「事態時」は「過去における過去」、すなわち、「ある1つの過去に相対的な過去」である。「より遠い過去」は「完了」に由来し、「より近い過去」は「過去時制」に由来する。現在完了は、「関連時 [より特定のには、現在] 包含的過去」を指示する時間表現 (例. at present, as yet, so far, since last week) とは共起するが、「関連時除外的過去」を指示する時間表現 (例. three days ago, at that time, last

week, yesterday) とは共起しない。それに対して、過去完了は、「関連時 [より特定のには、(ある1つの) 過去] 包含的過去」を指示する時間表現と「関連時除外的過去」を指示する時間表現の両方と共起する。上の例における 'a few minutes before' は、「関連時除外的過去」を指示する(「過去非完了」と共起する 'a few minutes ago' と比較されたい)。しかし、次における 'since three' は、「関連時包含的」である。

[I arrived at six,] but she *had been* there *since three*

こうして、ここでは、「完了はもはや、特定の包含的な過去を指示するわけではない。」過去完了は、単に、「別の過去時に相対的である(しかし、それを包含しているか除外しているかのどちらでもかまわない) 過去時」を意味する²¹⁾。

〈注〉

- 1) Rodney Huddleston, *Introduction to the Grammar of English* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), pp. 101–102.
- 2) Huddleston (1984 : 128–129).
- 3) Huddleston (1984 : 130).
- 4) Huddleston (1984 : 130–131).
- 5) Huddleston (1984 : 131–132).
- 6) Huddleston (1984 : 132).
- 7) Huddleston (1984 : 132–133).
- 8) Huddleston (1984 : 143, 80–81).
- 9) Bernard Comrie, *Tense* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), p. 36.
- 10) Huddleston (1984 : 143–144).
- 11) Huddleston (1984 : 172–173).
- 12) Huddleston (1984 : 173).
- 13) Huddleston (1984 : 153).
- 14) Huddleston (1984 : 156–157).
- 15) Randolph Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London: Longman, 1985), p. 214.
- 16) 大江三郎『動詞(1)』「講座・学校英文法の基礎」第四巻, 研究社出版, 1982年, pp. 211–212.
- 17) Huddleston (1984 : 158).
- 18) Huddleston (1984 : 162).
- 19) Quirk et al. (1985 : 210–211).
- 20) Quirk et al. (1985 : 212)
- 21) Huddleston (1984 : 162, 158–159).